

# NUPRI NEWS

Nagano Urban Policy Research Institute

NPO法人  
長野都市経営研究所

Vol. 71

2025.APR.

NPO法人 長野都市経営研究所

発行/NPO法人 長野都市経営研究所 〒380-0834 長野市大字鶴賀問御所町1289-1 丸本ビル2F TEL 026-235-7911 FAX 026-235-6166 https://www.nupri.or.jp E-mail: nupri@nupri.or.jp

**NUPRI  
全体懇談会**

令和7年2月6日  
14時30分～

ホテル国際21にて開催

**長野への誇りがNUPRI活動の原点  
地域資源を生かしたひとづくり、  
まちづくりを力強く推進**

去る2月6日、「NUPRI全体懇談会」が役員・会員合わせ50余名の出席により開催されました。昨年のNUPRI設立30周年を経て、数々の施策が地域活性化に貢献している手応えを感じている一方で、時代の変化に柔軟に対応できる組織づくりが重要であると確認する場面もあり、改めて今後への取り組みや課題を話し合う機会となりました。各部会の代表から活動報告ならびに今後の活動方針について発表が行われ、会の終わりにNUPRI会員である若林健太氏から挨拶

をいただきました。会場を移して行った講演会では、俳優で農業コンサルタントの永島敏行氏の講演会を実施し、会員や応募された市民も含めて110名の聴衆が幅広いフィールドで活躍する永島氏の話に興味深く耳を傾けました。その後の懇親会でも、長野市の活性化策について会員同士の熱心な議論が繰り広げられました。

## 理事長あいさつ

### ■実行力を発揮し未来を拓く

鷲澤幸一 理事長



本日は、お足元の悪い中お集まりいただきありがとうございます。この間、新幹線で仙台へ

行き、帰りは大宮駅で乗り換えて長野駅まで帰ってきました。大変驚いたのは、大宮駅から長野駅に向かう新幹線の乗客がほとんど外国人だったことです。今、長野駅は多くの外国人観光客で大変賑わっています。外国人の流入が長野市の経済に貢献していることは間違いないですが、この流れをどう地域活性化に生かせるか、我々も考えるべき時にきているのではないかと思います。

さて、アメリカ大統領選挙を経て、ドナルド・トランプ氏が大統領に就任し1カ月が経ちました。未だに賛否両論があり、私のアメリカ人の友達も賛成派と反対派にくっきりと分かれています。賛成派はもちろん共和党員が多いのですが、選挙で訴えた公約や経済政策を次々と実行に移していることで多くの支持を得られているようです。彼の実行力は、我々も見

**祝電**

長野市長 荻原健司様より

NPO法人長野都市経営研究所様の全体懇談会のご開催を心からお喜び申し上げます。関係各位の並々ならぬご尽力に敬意を表しますとともに、皆様方の今後ますますのご健勝と一層のご活躍をお祈りいたします。

習わなければいけないのではないのでしょうか。長野市の地域活性化に尽力する団体として、NUPRIもその実行力やリーダーシップを発揮し、柔軟な体制で存在感を示したいと考えています。今年度もさまざまな事業が計画されています。この取り組みが長野の未来につながるように、皆様のご理解、ご協力をぜひよろしくお願い申し上げます。

## 各部会中間活動報告と 今後の活動方針

### 産学連携部会

#### 大学との連携を推進



掛谷嘉則理事

長野県立大学と様々な連携を進めており、今年度は「ケースメソッドで学ぶ

経営塾」と題し、自社の企業戦略や求める人材像などについて会員企業の社長または経営幹部による講義を行いたいと考えています。これは、長野県立大学の学生の7割が県外の企業に就職しているという現状に鑑み、長野の企業の魅力を知ってもらい、1人でも多く県内企業に就職してもらうための事業です。

先日2社の経営幹部に説明会に出たいただいたのですが、その企業を学生達に知りませんでした。改めて我々個々の発信力が大切だと実感した次第です。その一方で、学生には企業のあり方や地域との関わり方などを講義していただき、大変有意義な時間を持てたと考えています。

### 「つ」掘れ！長野調査隊

#### 山城を歩いて知る長野の歴史

竜野泰一 調査隊長



今年度は、昨年度に続いて山城企画を推進。今回は、葛山城を厳選しました。

武田方の旭山城に対する向城として上杉方が築いた城といわれており、山頂の本丸跡からは敵陣の旭山城を窺うことができます。実際に参加していただけたのは4名という少ない人数で残念ではありましたが、案内人が2名ついた豪華なツアーでした。詳しくはNUPRIのホームページでご覧いただけます。

長野地域には70を超える山城の痕跡が残っており、ながの観光コンベンションビューローのホームページには、「ながの山城あるき」歴史トレッキングガイド」というページがあります。写真とイラスト付きで歴史を学ぶこともできるので、皆さんも健康のためにトレッキングしてみたいかがでしょうか。

### 「まちの奥見」活動

#### 門前の魅力を引き出し、価値を伝える

鈴木隆治 事務局長

令和6年度は、5月11日に「まちの奥



見」と題して善光寺表参道界限の大店等を訪れ、普段は見ることのできない奥の

間などを特別に見させていただくイベントを開催しました。当イベントの実行委員長の根城知哉君（R-DEPOT勤務）と協働することで、次世代の若者のまちづくりへの機運を高めることができたいと思います。

令和7年度は、①長野の魅力により多くの市民に知っていただく ②中心市街地の店をクローズアップすることでまちの活性化を図る ③若者との協働を通じた人材育成を目的に「まちの奥見」を5月と10月に開催する方向で検討しています。

### 中心市街地活性化活動

#### 来訪者が回遊できるまちに

倉石智典 事務局次長



現在の中心市街地の状況をご報告させていただきます。まず、権堂では若者が

夜に集える場所をつくりたいということ、ノンアルコールのスナックがオープンしました。空き店舗が増えていた西鶴賀町にも若手経営者らによる新たな店が

次々と開店しています。

長野市では、中心市街地の歩行者減少や商店街の衰退に対し、来訪者の回遊性を高め、沿道商店街などの求心力を取り戻すことを目的に「中央通りトランジットモール化計画」が推進されています。

昨年11月28日には、長野県知事、長野市長、東急(株)取締役会長が集まり、長野市の中心市街地活性化についての懇談会が行われました。中心市街地活性化は、平成10年から始まった市町村が策定した中心市街地活性化基本計画を国が認定する制度ですが、令和5年度では認定を受けたのがわずか7団体のみということですので。時代が変わる中で、中心市街地活性化という名称も含めて、これからのように取り組んでいけばいいのか、会員の皆さんにもお話を伺いして、それを理事長にお伝えしながら引き続きNUPRIとしての役割を務めていきたいと考えています。

### わいがやサロン活動部会

#### 新しい力で前進！

岩野彰 相談役



先程会員の方から、わいがやサロンの企画会議に長野県立大学の学生に参加してもらったらどうかというお話をいた

いただきました。ありがたいご提案で、ぜひ検討させていただきます。

相談役としては、鷲澤幸一新理事長に代わってから若い方が増えたなと感じています。NUPRIはもともと新理事長のご尊父の鷲澤正一さんが、長野冬季五輪の盛り上げと、その後の地域活性化に尽力することを目的に設立された団体です。なぜこんな話をするかというと、現在須坂市にイオンモールが建設中で、長野市街地の商店街にも多大な影響が出ると考えているからです。ぜひ若い力で議論をし、長野市に喝を入れていただきたい。新しい会員の方もたくさんお見えになりましたので、皆さんで新しいNUPRIを創っていただければと願っております。

## ■新産業創出部会

### 農業で長野を元気に



#### 竹内伊吉 理事

りんごの木  
オーナー制度は  
25回目を迎え、  
11月23日には収  
穫祭が行われま  
した。令和4年にフラン病にかかった木を相当数伐採したことで、オーナーのりんごの木からではなく、おんびら農園指定のりんごの木から1口につきカゴ2つ分を収穫してお持ち帰りいただきました。

りんごの木も古くなり、生産者の高齢化も進んで、次の展開を検討していかねければならないと思っています。

三水米の生産・販売も行っており、米の価格高騰の中、5kg2000円と非常に安価で販売しており、好調な売れ行きです。

## ■スポーツ振興部会

### 新監督・新経営陣を迎え、いざJ2へ

#### 鷲澤幸一 理事長

新しく藤本主税監督が就任され、なんとかブレイオフに残る6位以内に入りたいと考えているところです。経営陣もガラッと代わりました。この方々に経営のバトンを渡して、しっかりと地に足がついた経営環境になると期待しています。

さらに来年度の2026・2027シーズンは8月に開幕、ウインターブ레이크期間を経て2027年5月最終週頃に閉幕となります。7月がシーズンオフになりますので、キャンプ地として長野も選ばれるのではないかと考えています。現在、飯綱町に人工芝のサッカーグラウンド「パルセイロフィールド」があり、そこを拠点にキャンプ誘致を実現させたいと思っています。ゆくゆくは、ラグビーの菅平のように、サッカーの飯綱と呼ばれるような聖地を目指していきます。

## ■地域野球クラブ「信越硬式野球クラブ」の応援活動

### 東京ドーム出場を目指して

#### 茂谷浩子 会員

今年は1月上旬からチームが始動しております。まずは都市対抗野球大会への出場を目標に頑張っているとございませう。都市対抗野球大会の本戦に出場しますと、スコアボードの横にチーム名ではなく都市名が掲げられるということもあり、ぜひ本戦に出て長野市をアピールしたいと思っています。また、青少年の育成を目的に、従来より行っている小中学生への「野球教室」を幼稚園、保育園等の園児へ拡大した「ティーボー

ル教室」も開催していきます。常に勝利を目指す強いチームであること、同時に次世代の子供たちに夢と希望を与える存在でありたいと考え活動していきます。

## ■講演会開催事業

### 市民参加の講演会

#### 鈴木隆治 事務局長

今回の講演会は、掛谷理事のご推薦で永島敏行さんにお越しいただき開催いたします。来年度の講演会の講師はまだ決まっておりますので、この人の話を聴きたいという方がいらっしゃいましたら私にお声がけください。よろしくお願いたします。

### 自民党長野1区支部長

#### 若林健太氏のごあいさつ

私は、NUPRIとは初代理事長の鷲澤正一さんの時代からずっと関わらせていただいております。世代交代で鷲澤幸一理事長のもとで新しいまちづくりに取り組むということで、大いに期待しているところがございます。先程は理事長からトランプ大統領のお話が出ましたが、私もトランプ氏の登場というのは歴史の必然だと思っています。グローバルイズムからデカップリングに進行し、さらにトランプ氏の登場によって世界の歯車は

ものすごい勢いで動いていくのではないかと思います。日本、そして長野も大きな潮流から置いてきぼりにならないよう、ここが踏ん張りどころです。NUPRIには引き続きメンバーとして関わらせていただき、皆さんと一緒に長野のまちを未来へとつなげながら前を向いてまいりたいと思います。よろしくお願申し上げます。



# 長野の魅力を 世界へ

講師：俳優・農業コンサルタント 永島敏行氏

全体懇談会に続き、永島敏行氏の講演会が一般公開で開催されました。農業コンサルタントとして活動する永島氏は長野県との縁も深く、小谷村での棚田再生プロジェクトや松本市、安曇野市での「田んぼアート」など地域活性化にも多大なる貢献をされてきました。時にはエンターティナーとして会場を盛り上げる永島氏の話に、集まった110名の聴衆は深く聴き入っていました。約90分の講演を抜粋掲載します。

## 野球に熱中した中・高・大学時代 人気野球映画で役者デビュー

僕は、千葉県千葉市で生まれました。旅館の息子でした。まだ東京湾が埋め立てられる前で、子供の頃は春になると家族みんなで近くの東京湾に出かけて潮干狩りをしました。潮が引くと遠浅になっているから、だいたい5kmほど沖まで歩いていけるんですね。下駄を履いて砂に足を沈めて後ろに下がる。ツイストみたいに踊りながら後ろに下がっていくと、足の親指と人差し指の間にアサリが引つかかって面白いように採れるんです。1日潮干狩りすると、親子でほしい60kgくらいのアサリが採れました。そうすると朝の味噌汁は毎日のアサリ、アサリ三昧でした。

昭和30年代、僕が子供の頃はちょうど高度経済成長期で非常に活気がありました。一方、両親はというと昭和一ケタ生まれで、10代半ばは戦争が始まった頃でした。そういう意味では、暗い青春時代を過ごしていたので、楽しみといえば映画だったんですね。僕も一緒によく映画館に連れて行ってもらいました。そんな両親の教育方針は、「体に悪いから勉強するな」。保育園も幼稚園にも行かせてもらえず、毎日旅館の庭で遊んでいました。共働きだったので両親ともに忙しく、その代わりに従業員の方が入れ替わり立ち替わりで僕の面倒を見てくれました。いろんな人とおしゃべりをして遊んで、今思えばいい経験させてもらったと思っています。

僕が子供の頃は王貞治さん、長嶋茂雄さんが活躍していたV9黄金時代で、2人に憧れて中学、高校と野球部

### 【永島 敏行 氏】プロフィール

1956年生まれ、千葉県千葉市出身。専修大学文学部人文学科卒業。高校・大学時代は野球部に所属し、その経歴を買われ、1977年に映画『ドカベン』で俳優デビュー。主演を務めた2作目の『サード』で国内の各新人賞を獲得以降、「主演男優賞」として第2回日本アカデミー賞、第24回ブルーリボン賞など多数受賞。自らチームを持つほど熱中している野球や殺陣、さらには米作りなど幅広い趣味のほか、農林水産物に関するコンサルティングならびに講演などを行う「有限会社青空市場」の代表取締役でもある。長野県との交流も盛んで、県内各地域での農業体験ツアーや体験教室のほか、都内にて長野の食材を用いた試飲試食会や物産販売など多数手がける。

に所属しました。大学は専修大学の文学部人文学科ですが、そこでも準公式野球部で毎日練習に明け暮れる日々でした。そんなある日、一人暮らしをしていたアパートに父親から突然電話がかかってきたんです。「映画のオーディションの書類選考に通ったから、明日東映に行け」と言われ、びっくりしたけど東映に行ったら高倉健さんや菅原文太さんに会えるかもしれないって軽い気持ちでオーディションを受けました。高倉健さんといえ



存知でしょうか、存命中は毎年長野市を訪れて善光寺に参拝されてきましたね。

さて、当時の僕は、学芸会はもとより演技なんてやったことがありません。ところが、最終選考の実技審査が野球だったんです。芸は身を助くじゃないですが、芝居は下手でもオーディションに受かり、初めて映画『ドカベン』に出演しました。スクリーンで自分の演技を初めて見た時は、こんな下手くそな役者はどこにもいないって思いました。でも、その時の屈辱感が、いつかは見ていろという気持ちになって、役者を続けていく原動力になったのかもしれない。

## 全て手作りで米作りを始める

役者を続けていつて帝国劇場などの舞台に出ていた時、イギリス人の演劇プロデューサーの方から「君、ボイストレーニングをしたほうがいいよ」と言われたんです。野球をやってきたから声はでかい。でも「その発声ではお客様に届かない」と言われて、初めて日本を離れてイギリスに留学しました。3カ月間、ロイヤル・シエイクスピア劇団のボイストレーナーに教わりました。劇作家



の家にホームステイしたのですが、イギリス人はどこにか議論好きなんです。週末にはホームパーティーを開いて、みんなでお酒を飲みながら次から次へとテーマを出して議論します。ある時、ひとりのイギリス人から「日本人はどういう国民性なんですか？あなたのアイデンティティは何ですか？」と聞かれて絶句しました。そんなこと日本に一度も聞かれたことはないし、自分で考えたこともなかったですから。そのことがすごく印象に残って日本に帰ってきました。

その後、結婚して娘が生まれました。僕たち夫婦は2人とも自然豊かな場所で育ったので、娘にも田んぼの畦でザリガニを捕ったり、のびのびと自由に遊ばせたいと考えていました。その頃、故郷の秋田に帰っていた大学の野球仲間が映画祭をやりたと言って、『あきた十文字映画祭』の立ち上げを手伝うことになりました。横手市十文字町は、非常に農業が盛んな場所、何回か通ううちに、こういう自然の中で娘を遊ばせたいと思うようになったのです。そこで知り合いになった生産者さんに「米作りを教えてほしい」と頼みました。でも、「俺たちはプロだぞ。子供を遊ばせるためになんで米作りを教えずなくちゃいけないんだ」と断られました。それでも何度かお願いするうちに「じゃあ、全部手作りでやるなら教えてやる」と言われて、「わかりました、お願いします」と、米作りを始めました。米作りに興味を持ったのは、娘を自然の中で遊ばせたいという思いのほかに、米作りを通してイギリスで質問されたことの答えが見つかるかもしれないと考えたからです。

何しろズブの素人ですから、最初は大変な思いをしましたが、初めて自分で作ったお米を食べた時は、おかずなしでも美味しかったです。娘も自分の体を使って田植えをして収穫したお米だからなのか、それ以降食べ物を残すことがほとんどなくなりました。今は結婚して子供もできて、自分が体験したことをやらせたいと同じよう

に親子で米作りをしています。僕は、それが非常に嬉しかったですね。今の時代、コンビニへ行くと、おにぎりなんて当然のように棚に並んでいます。でも、あって当たり前前という感覚を娘には持つてほしくなかった。汗水流して苦労して初めて食べ物のありがたみを知ったことは、娘にとって大変貴重な体験だったと思います。

長野との関係では、20年前に小谷村に呼ばれて棚田を蘇らせるという活動に参加しました。その時、感じたのは小谷村の方たちはすごい経験と知恵の塊なんだなということでした。僕が小谷村に行く前に姫川流域で土石流が発生して、小谷村へ行く道路が寸断されたことがありました。自衛隊が緊急出動したのですが、小谷村の人たちは「自衛隊が来てくれるなら道を造らなくちゃいけない



い」って言って、大きな石なんかを重機を使って全部どかして自衛隊が入りやすいように道を造ったそうです。これじゃ自衛隊はいらないじゃないかって思うくらい、経験と知恵で切り拓いていく。棚田再生の取り組みもそうでした。棚田の土地は水平じゃないから、水がどんどん下へ流れていってしまう。それを自分たちの昔ながらのやり方で堤防を造り、あつという間に棚田を完成させてしまった。百姓という言葉には、百の仕事ができる人という意味が込められています。小谷村の人たちは、まさに百の仕事を経験と知恵で叶えてしまうスーパーマンだなと思いました。

他にも松本市や安曇野市で「田んぼアート」のディレクターを務めました。松本市では、友人でもある中村勘三郎さんとともに、「二人桃太郎記念たんぼアート」を制作しました。歌舞伎は農村歌舞伎といって、もともと農村から始まったものです。それで歌舞伎と農業をコラボレーションしようということで、勘三郎という話をして田んぼアートに決めました。安曇野市では、勘三郎さんが主演するNHK大河ドラマ「いだてん」の金栗四三の雄々しい姿を田んぼに描きました。

## 消費者と生産者をつなぐ 青空市場を主宰

農業を始めて驚いたことは、生産者に価格決定権がないことでした。作物は全て農協に卸して、直販もできない状況です。そこで20年前に「有限会社青空市場」を設立し、今でいうマルシェを銀座で始めました。新鮮な野菜や果物がずらりと並んで、生産者と言葉を交わしながら買えることが非常に魅力的に映ったようで、大勢の人が来てくれました。東京駅の行幸広場で開催しているマルシェは、もう12年になります。長野では、千曲市からヤンキーの兄ちゃんかと思うような若者がぶどうを運ん

できてくれて、それが飛ぶように売れます。地方から来る生産者さんは方言も魅力ですね。この生産者さんと話したいから買いに来るっていうファンも増えてきて、マルシェはモノを売るのではなくて人を売っているんだなとつくづく思いました。ネットの時代になってもリアルが欲しいという人は多い。だから定着したファンがいる生産者さんは、週1回のマルシェで20万円くらいの売上げがあります。平均価格500円くらいなんですけど、それだけお客様がついているということですね。

## 全国を歩いて多様な価値を 持ち帰る世間師の存在

農業コンサルタントとして活動していると、全国各地の生産者さんと出会う機会があります。その中で印象に残っているのは、徳島県で日本初の「つまもの」の専門業者として料理の脇に添えられる葉っぱや花などを販売している株式会社いろどりの横石社長です。彼は各地を回って情報を収集し、地元の皆さんと情報を共有しながら販促戦略を立ててサービスや商品づくりに活かしています。僕は、この情報を持つてくるという人が非常に重要だなと考えています。

この情報を持つてくる人について、昨年4月13日に掲載された日本農業新聞の一面コラム「四季」の文章に感銘を受けたので、ここで読ませていただきます。「世間師いだよ」というタイトルです。

「財政界で不祥事が起こると、よく村社会の文字が躍る。因習に縛られた閉鎖社会のイメージで語られる。めでたきものではないが、民俗学者の宮本常一が、集落に存在し、社会を見聞して歩く世間師の存在を証明している。明治から昭和の前半まで、どの村にも世間師がいて、村の内と外を繋いだ。こうした世間師が村を新しくしていくためのささやかな方向付けをしたことは見逃せない。

(中略) 地域の活性化は、その地域の人々がいきいきと希望を持つて暮らせること。そんな農村を子や孫の代まで残せた時、初めて地方創生と呼べるという。大変とは大きく変わることに。村に新しい風を吹き込む、世間師よいでよ」

インターネットで世界中の情報が集まる時代ですが、やはり生身の人間の情報が一番説得力があります。マルシェにいと全国からいろいろな人たちが集まり、様々な情報が寄せられます。その情報は、ある人にとってはすごく価値の高いものかもしれない。情報をどのように誰に伝えるか、そのためには人と人との出会いも大きなカギとなります。遠い昔に存在した世間師が、今の時代にこそ必要とされているのではないかと考えています。

